

高等専門学校図書館の運営とサービス

Administration and Services of College of Technology Libraries

学籍番号：201621626

氏名：中川 潤紀

Hiroki NAKAGAWA

1962（昭和 37）年度に設置された高等専門学校（以下、高専と略す）は、「中学校卒業を入学資格とし、「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成すること」（学校教育法第 70 条の 2）を目的とする修業年限 5 年（商船に関する学科のみ 5 年 6 か月）の学校」（新教育学大事典 第 3 巻、第一法規出版、1990.7, p.159）であり、その教育目的は、「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成すること」（学校教育法第 115 条）である。高等専門学校設置基準の第 23 条では「校舎には、少なくとも次に掲げる専用の施設を備えるものとする」として、第 3 号で「図書館、保健室、学生控室」を規定している。高等専門学校図書館（以下、高専図書館と略す）は、一般科目と専門科目に対する学習支援をしてきたが、専攻科の整備ともなって、研究支援も期待されている。高専の学生は中学校卒業後に入学するため、高専図書館では、学校図書館で実施されるような読書指導を行い、全人的教育を施すとともに、学生の教養を深める必要もある。したがって、高専図書館には、教育・研究を支援する大学図書館、および、教育課程の展開に寄与し健全な教養を育成する学校図書館、の両者の機能を兼ね備えることが求められている。従来、高専図書館については、個々の論考や事例が発表されているが、全体的な分析・考察は十分に行なわれていない。

そこで、本研究では、1960 年代から現在までの高専図書館を対象として、高専の歴史的経緯を踏まえた上で、高専図書館の運営とサービスについて分析・考察した。その際、大学図書館と学校図書館の機能に注目して分析した。研究方法は、文献調査、質問紙調査、訪問調査を用いた。

1962（昭和 37）年の高専発足当時は、図書館施設（建物）が未整備であったため、高専校舎内の一室を図書室とすることで、その機能をまかなっていた。1969（昭和 44）年以降、高専図書館は、学生会館の機能を含む多目的な複合施設の図書館センターとして建設された。その結果、図書館センターの管理、責任体制が問題となった。1975（昭和 50）年頃から、高専図書館の電算化が検討され、各館の独自システムで電算化が進められた。しかし、職員不足や予算不足によって、書誌データの遡及入力等の手間が問題とされた。

1991（平成 3）年以降、電子化への取組みが始まり、学術情報センター（NACSIS）に接続したサービス提供等が開始された。1992（平成 4）年以降、高専の専攻科設置によって、研究面のサービス強化が要求されるようになった。1998（平成 10）年頃から、長岡技科大を中心に電子ジャーナルコンソーシアムの契約、高等専門学校及び技術科学大学図書館情報シンポジウム、国立高専図書館と長岡技科大図書館間の統合図書館システム等が整備され、高専図書館を支える共通基盤が形成されてきた。2004（平成 16）年には、国立高専の法人化によって、国立高専機構が創設された。

高専図書館には、専門教育・研究の支援と教養の育成といった、大学図書館と学校図書館の機能があり、資料費や職員数が減少する中でも、高度なサービスの提供が求められている。高専図書館は、高専図書館を支援する組織（長岡技科大図書館、国立情報学研究所（NII）、国立高専機構図書担当）が提供する共通基盤を活用して、小規模ながらも 2 種類の図書館機能を両立させている。高専図書館は、各館の独自性を維持しながら、共通基盤を踏まえた横の連携と問題共有を図り、共通基盤から得られるスケールメリットを活かした運営をすることが求められている。

研究指導教員：平久江 祐司

副研究指導教員：大庭 一郎